



TITLE:

爲替の逆調による輸出増加に就て

AUTHOR(S):

小川, 福太郎

---

CITATION:

小川, 福太郎. 爲替の逆調による輸出増加に就て. 經濟論叢 1924, 19(3): 456-463

ISSUE DATE:

1924-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128198>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第九十卷 第三號

大正三十三年九月一日發行

## 論叢

世界の貨幣交通……………法學士 作田 莊一

フィアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

海運會社の保護と海運同盟の監督……………法學士 小島昌太郎

## 時論

奢侈課税としての關稅……………法學博士 神戸 正雄

## 說苑

宗教と社會主義との關係……………法學博士 財部 靜治

獨逸の國內植民事業……………法學博士 河田 嗣郎

## 雜錄

漁船の遭難に就て……………經濟學士 蜷川 虎三

爲替の逆調による輸出増加に就て……………經濟學士 小川福太郎

統計的計數……………經濟學士 岡崎 文規

## 爲替の逆調による輸出

### 増加に就て

小川 福太郎

我國に於ける近時の對外爲替相場の崩落は、我國の對外信用並に貿易上に種々なる影響を及ぼすがために、其對策が既に屢々論ぜられてゐるが、其等の意見の中には、元來、爲替相場の逆調は商品の輸出を有利にし其輸入を不利にすることに成るから、是を其儘放任して置いても所謂自動的調節の行はれることに依て次第に回復する、従つて爲替の逆調は敢て意どするに足らぬといふのがある。私が茲に少しく述べて見ようと思ふのは、爲替の逆調に基く輸出の有利といふことは如何にして起り得るかといふこと、及び、斯くして生じたる輸出の増加は良好

なる結果を其國に残すものであるか否かに就てである。それに就て先づ明になし置くべきことは茲にいふ爲替の逆調は、特に不換紙幣國又は金の輸出禁止をなせる國の、金の輸出入の自由なる國に對する爲替相場が、金輸出點を越へてゐるものを指すのであつて、現時の日米爲替は其適例である。

さて、私は説述の順序上、右にいふ爲替の逆調が何時でも輸出を増加せしめ輸入を減少せしむるに至るものであるか否かを、最初に述べる必要がある。

#### 一 爲替の逆調と輸出入の増減

爲替相場が逆調になれば、それが金の輸出入點を限界として動いて居る時に比べて、輸出が行ひ易くなり其輸入が行ひ難くなる傾向のあることは疑を容れない。蓋し輸出者は多くの自國通貨を受取り得ることになり、輸入者は從來よりも多くの自國通貨を支拂はなければならぬからである。然しながら此傾向あればさて、事實上輸出が増加し輸入が減少するためには、物價

の状態が大なる關係を持つてゐるから、爲替相場と物價とを比較して見なければならぬ。例へば、爲替相場が逆調となり即ち自國貨幣の對外價値が低落しても、其程度が物價の騰貴即ち自國貨幣の對内價値の低落以下であるならば、決して輸出の奨励とならない。否却つて輸入を助長するに至るかも知らぬ。従つて「爲替の逆調が輸出を増加し輸入を減少せしめるためには、其逆調（自國貨幣の對外價値の低落）の程度が、物價の騰貴（自國貨幣の對内價値の低落）の程度以上でなければならぬ」とは理論上稱せられてゐる事柄である。

然しながら尙少しく考へて見ると、右いふところの自國貨幣の對内價値は、通常是を計るに一般物價指數を以てするのである。此の一般物價指數なるものは時に依つて騰落相反する個々の價格の平均である場合もあるから、假令一般物價指數の騰貴程度は爲替相場の逆調の程度よりも低くても、或物の價格が其平均より可成り高く且つそれが重要輸出品である様な場合に

は、其ものゝ輸出が増加し得ないこととなる。且又すべての個々の價格の騰貴程度が爲替の逆調程度より低いとしても、其國の物價に比べて相手國の物價が一般に遙かに安い時には、前者より後者への輸出が増加し得ないこともあり得る。

以上は、爲替相場が逆調となつたのみでは、必しも常に輸出の増加、輸入の減少となつて現はれないことを述べたのであるが、今、論述の便宜上、爲替相場の逆調の程度が物價騰貴の程度以上であるために、輸出が促進され、輸入が抑制される状態にありとして、其際輸出者は如何なる場合に、事實上利益を獲得することが出来るかを考へて見なければならぬ。

## 二 輸出者の利益獲得の原因

此點に關して Fontana-Russo が種々の場合を列擧して考察してゐる。<sup>1)</sup> それに據ると

(一) 輸出者が其輸出貨物に對する爲替手形を賣却したる金額を、輸入國の貨物買入の支拂に充てるならば利益は消滅する。爲替相場が輸出

に有利であれば其丈輸入には不利であるから、輸出に依て得られたる利益が、此場合に消滅することは當然である。

(二) 然らば輸出者が爲替手形の賣却代金を以て自國の物品を買入れる時はどうなるか、此時には、

(イ) 若し其自國商品の價格が紙幣の減價のために金の打歩に等しい丈の騰貴をして居るならば利益は消滅するであらう。(此場合、金の打歩の騰貴は自由鑄造制度の存在によつて、爲替の逆調の程度と事實上同一となると見る)。

(ロ) それと反對に自國商品の騰貴の程度が、金の打歩より少ければ利益は殘存してゐる。

(ハ) 更に自國商品の騰貴の程度が金の打歩以上であれば損害を來す。

(三) 輸出者が爲替手形賣却金額を以て舊債務の辨濟に充つる場合。

(イ) 此債務が、金の打歩の存在してゐなかつた時又は其打歩が現在よりも一層少かつた時

1) Fontana-Russo, Traité de politique commerciale. 1908. pp. 127-134

に契約されたものであれば、輸出者は利益を得ることになる。

(ロ) 此債務が金の打歩の一層多かつた時に契約されたものであれば、輸出者は損失を蒙るであらう。

(四) 輸出者が爲替手形賣却代金の全部又は一部を租税の支拂に使用する時。此時も(三)と同様に利益を受。又は損失を蒙る二つの場合が考へ得られる。

(五) 輸出者が手形賣却金額を以て賃銀の支拂に充つる場合。此時に於ても賃銀の騰貴程度が金の打歩より以下であるか以上であるかに依りて、輸出者は利益を受け或は損失を蒙ることになる。

以上各種の場合を通覧して知り得ることは、輸出者が事實上利益を得ることになるのは、主として爲替手形の賣却代金にて、白國の商品を購入し、賃銀或は租税の支拂をなす場合に、其商品の價格、賃銀或は租税の騰貴率又は増加率が金の打歩の増加に及ばない時である。

雜錄 爲替の逆調による輸出増加に就て

於之、次の問題は爲替の逆調又は金の打歩の程度と同じ割合にて其國の物價、賃銀等が騰貴するか否かといふことであるが、是等のもの、騰貴は決して一様ではなく其間に遲速があることは、史實に依りて研究したる學者のいふところである。Subercaseauxの研究に據れば、同じ輸入品の中に於ても、専ら外國より輸入されなければならぬものは爲替の變動によつて直接影響される、然し其國に同様なる競争品のある場合には、金の打歩が内國品に對する一種の保護税となるから、内國の工業をして、金の打歩の増加に相應する價格よりも稍低價で内國品を賣ることを許さしめる、何となれば内國の生産費は爲替相場と比例的に變動せないからである。次に輸出品の價格は金の打歩又は爲替の變動に依りて直接影響される、即ち輸出の有利なるために、輸出者間の競争に依りて其價格が騰貴する。更に、輸入も輸入もされない物品は、爲替相場の影響を直接受けない、然し其影響が次第に及ぶ傾向のあることを彼は認めてゐる。最後に勞働者

第十九卷 (第三號 一五一) 四五九

の賃銀、公私の被傭者の俸給、家賃、定額収入の如きものに至つては、或は慣習或は企業者の抵抗によつて其騰貴は直ちに生ぜない、彼は此點に關して史實に依る研究の後に、「爲替の下落又は金の打歩の騰貴の生ずる時には、賃銀の騰貴は直ちに生ぜず、寧ろ暫く經つてから、しかも通常低き割合に於て生ずると一般に言ふことが出来る」といつてゐる。

要するに茲に問題とする輸出者の利益なるものは、自國の他の者の所得の増加が金の打歩の増加又は爲替の下落と比例的でないことから生ずるのであつて、換言すれば他の者の所得を犠牲にし就中勞働者、俸給生活者或は定額收入者が其最も大なる犠牲者となつて居るためであると言ひ得るのである。

此言は決して獨斷ではない、最近 Walter が其著に於て述べてゐるものは正に上述せしところを裏書してゐるものであり、其實例は馬克の暴落せし獨逸に於て見出すことが出来る。Walter は言ふ「爲替相場が先づ下落する時は製造業

者には利益となる、彼等は爲替が下落したる程度に迄、自國の通貨で現はされた價格を、外國人に對して、より高くすることなしに、高め得る。其新價格にて彼等は、以前の低き生産費の儘で製造されたる貯藏品を賣り其差額を儲けることが出来る。其利益は彼等の古い貯藏品のある限り存続する。更に、新しい品が、以前の價格で買はれたる殘存せるところの貯藏原料から、又それらの原料が盡きた時には、爲替の下落に因つて一層高く買はれたる新原料から製造されねばならぬ。勞賃は其間に騰貴しつゝ、ある、然し其騰貴は一般に物價よりも遅く、俸給は勞賃よりも尙一層遅い。(此際)其國に於て作り出される原料及び食料の價格が如何程速かに騰貴するか、且又鐵道運賃の騰貴が如何程遅いかといふ様な問題によつて面倒が生じてくる。が然し、概して言へば以下述べることは眞である様に思はれる。即ち以前からの原料の貯藏がある限り、下落したる爲替は尙製造業者に差額を儲けさせる、其貯藏が盡きるに至つた時でも

1) G. Subercaseaux ; op. cit., pp. 220-221.

尙、勞賃や俸給は恐らく物價と同じ割合に高くなつてゐないであらう、其勞賃や俸給が遅れてゐる丈、製造業者の利益は、或は勞賃が適應するために生ずる可能のある軋轢や同盟罷業に依て相殺されることがあるかも知れないが、尙殘存する。最後に爲替の下落が止まつたと假定すれば物價と勞賃との新なる均衡が得られ、下落したる爲替は製造業者にとつて利益あるもので無くなる。<sup>1)</sup>彼は尙續いて言ふ。

「此點に於て、工業家の利益が、必しも彼等自身の希望からでなくても、それは主として自國の勞働者、俸給生活者、定額收入を受ける階級のポケットから獲得されたことは充分明かである。勞働者の所得の増加は比較的遅く俸給は尙一層遅く、定額收入は少しも増加せない。輸出品の價格は爲替が下落すると直ちに騰貴する、國內の物價はそれに續く。輸出品の價格は必しも爲替が下落したと同じ割合で騰貴せない、——若し同じ割合で騰貴すれば爲替下落は輸出貿易を促進せしめないであらう。更に國內

の物價も輸出品の價格と同じ割合で必しも騰貴せない。國內の購買力の制限や政府の調節等がそれをより低位に保たうとせしめる。然し何れにしても、下落しつゝある爲替に依て輸出貿易に與へられたる利益は、主として中流及び勞働階級を犠牲にして獲得せられることは、依然として間違のないことである。是等の階級こそは、馬克の下落に依つて獨逸の輸出貿易に與へられたる人爲的プレミヤムを支拂ふ人々である」<sup>2)</sup>

次に以上の言に對する獨逸の實例を舉げる。千九百二十二年の六月に於て、食料品の價格は戰前の六十倍乃至七十倍に、衣類の價格は八十倍乃至百倍に騰貴した。然るに勞賃は平均約二十五倍で、中位の俸給は平均十五倍乃至十八倍、高位の俸給は七倍乃至十一倍の騰貴であつて、定額收入に至つては少しも増加せなかつたのである。<sup>3)</sup>(註)

(註) 右の數字は千九百二十二年七月十五日の「ネーション」に出てたる H. N. Brailsford 氏の論文から引用せられたもの

- 1) H. C. Walter, Modern Foreign Exchange 2nd ed. 1924 pp. 93-94.
- 2) H. C. Walter; op. cit., pp. 94-95.
- 3) H. C. Walter; op. cit., p. 165.



であるが、元はプロシヤの首相が其議會に示したものであつて、其精確なる事に就てはB氏及び當時獨乙に居つたW氏が調査に依て認めてゐる。

爲替の下落による輸出者の利益が主として上述の如き過程に依て得られるものである以上は爲替下落より起る輸出の増進、輸入の抑制は一國に取りて好ましきものなりや否やの問題を生ずることゝなる。勿論何時かは輸出が利益あるものでなくなり、勞働者、俸給生活者等の所得も大體物價と均衡がとれる様になるであらう。其時期が何時であるかは、Walter も云へる如く

「理論的に言ふことは不可能である様に見える、其時期は確かに國に依て異り、就中、其國が工業的である程度、組織されたる勞働者の力、其國が食料及び原料に關して自給し得る程度に依て異なる」。<sup>1)</sup> 然し其時に達する迄の期間が長ければ其丈社會的不安の續く可能性が大である、何となれば物價の一般的暴騰に依て多數のもの、生活は脅され次第に困難となる。「勞働者の賃銀は絶えず増加しつゝあつても、それは物價騰

貴のために何物をも意味せない、彼等は、俸給者階級に至つては尙更、増大せる生活費に堪へることが出来ない、定額収入で生活する階級の購買力は夙くに消失してしまつてゐる、……：外國の市場は低廉なる品物に飽滿し、或は關稅や禁令に依て其れを排除するに至る、下落しつゝある爲替は其間に製造品の生産費を増大し、遂には磨損又は陳腐となれる機械を取替へ、貯藏品を維持するには、莫大な資本を要することになり、企業はために不振となる。製造品の騰貴は、就中、農業者をして彼等自身の必要以上に餘分の生産をすることは最早引合はない様な状態に近付かせる、……：國家の財政も、以前の通貨價値で定められた租稅では、新しい通貨價値で決定されたる經費を支辯する事が出来ないから、絶望的になる。凡て是等の状態及び其れが漸次強烈となる結果として、不満と不信任が増大し遂には國家及社會其のものゝ組織を危くするに至る」。<sup>2)</sup>

翻つて我國の現状を見る時、爲替の下落が尙

1) H. C. Walter ; op. cit., p. 95.

2) H. C. Walter ; op. cit., pp. 95-96.

續くならば漸次以上の如き状態に進んで行くことになる虞れがないとは云へぬ。爲替下落による輸出の増加に就て、論者は云ふかも知れぬ、我國の輸出品の大宗は生糸である。それは奢侈品であるから其輸出に依て大いに儲けることは差支ない。然し生糸も輸出總額の半ばを占むるに至らない、而も奢侈品たる以上、其需要には際限がある。其他の輸出品に至つては原料を外國より仰がなければならぬものが多い、此點は既に識者に依て言はれてゐる如く、輸入品が高くなければ自然、輸出品も高くなる。其他國民の生活必需品にして外國より仰ぐべき必要のあるものも多い。此種の問題は可成り複雑なるものであるから、尙研究せらるべき餘地は多い、只爲替の下落の繼續に依て輸出の増加、輸入の減少が甚しくなれば、前述の弊害の起り得ることは間違ひない。思ふに金の輸出入の自由なる國に於て、爲替相場が自由鑄造制度の存在によつて、金の輸出入點を上下の限界として騰落し、其限界を越へないといふことは極めて微妙

なる制度である。爲替相場が此限界を越へて甚しく騰落することは順逆何れの方向に於ても好ましからざる結果を生ずる。従つて輸出入の均衡廣く云へば國際收支の均衡といふとも此限度内に於て適當に維持さるべきものであらう。此點より見ても我國現在の金輸出禁止は可及的速度に解除せらるべきものである。(十三、七、二三)